

# 和製日用類書としての重宝記

## 一 はじめに

近世期において出版技術が著しく向上し大量の印刷物が商品として世に出回るに伴い、出版文化の進展が見られることは周知のとおりである。そのような近世期出版物の中に、多くの実用書や知識書など、板元の企画によって出版された書物があり、これらは多くの読者を獲得していた。近年、これらの書物が近世期の世相、風俗を反映していることに注目され、近世文芸全般を研究する上で必読の資料書であると考えられるようになった。本稿では、これらの書物と中国日用類書との関係を明らかにしてみたい。<sup>1)</sup>

## 二 研究史

生活において役立つ知識を情報として読者に提供するこれらの書物の歴史をたどると、まず中国においての類書が起源になるのではないだろうか。それでは類書とはどのような書物であるか。枅尾武「類書の研究所説」<sup>2)</sup>において類書の定義を『四庫全書』の解説書『四庫全書総目提要』(一七八二年)の序から枅尾氏が翻訳したものによると次のようになる。

小野 さやか

①類書の始めは皇覧である

②類書は経・史・子・集にまたがる著作から、類に従って文例を抽出したものである

③弊害として取りあげられたものであるが、故事の検索や本の注釈に役立つための文範である

④類書のおかげで散佚した古い文章の姿を知ることができる

⑤弊害として安易無批判に文章の孫引きをしたり、そのため堅実な学問をしなくなる

また酒井忠夫「明代の日用類書と庶民教育」<sup>3)</sup>にも、類書とは「中国の伝統的な書物の分類法からすれば、経、史、子、集、何れの部にも属せず、しかも経、史、子、集、何れの部も兼取した内容の書物である。…中略…類書とは、特定の目的の為にその目的にそう知識を網羅的に得るために、それに関する事文並知識を古書類及び伝註より広般且つ残すところなく蒐輯し、それを体系的な門類に分かつて整然と配列し、操觚者に検尋参照を容易ならしめるように、編纂された書物である。一般的に考えて、類書は所謂百科全書にちかいかいもの、百科事典か辞典にちかいかいものということができる」と、類書のもつ性格が説明されている。

このような類書の形式に、日用的な要素を加えた実用書や日用知識書といったものが、元から明清代と中国の主に建南、福建県において活発に出版された。中国文学の研究者はこれらの書物を「日用類書」と命名した。この名称については長い間、「日用百科全書」「通俗的日用類書」など様々な呼称で呼ばれていたものが、ここ数年で「日用類書」と定着したように思う。中国における実用書をこのように日用類書と命名することを方向付けた著作が小川陽一『日用類書による明清小説の研究』<sup>4</sup>である。「宋元のころからは、次第に日常生活にかかわる内容を取り入れた類書が作られるようになり、明代末期には、日常生活の万般にわたる手引書となることを意図した類書が各種出現した。『万宝全書』『不求人』などと称された書がそれである」との紹介がある。この著作の中で氏が金瓶梅と日用類書の関わりを示したことで、日用類書が当時の社会生活を写し出した資料であり、当時の文学や社会を理解するためには不可欠であることを証明し、日用類書が注目を集めたのである。

そして一九九九年に酒井忠夫監修『中国日用類書集成』第一巻（汲古書院）が開始される。この集成は十四巻から成り、明代に刊行され日本に渡来した中国日用類書の影印を載せ、二〇〇四年九月に全巻の発刊を終えた。酒井忠夫「序言」によれば「この種の通俗的類書の内容は、庶民の日常生活に通用した事項事文から成っている（人倫日用など「日用」の用語も見られる）、中国人の用語「類書」を合せて「日用類書」と自然に呼称するようになった」<sup>4</sup>とあり、「日用類書」の用語の定着を促した。

「日用類書」の特徴を各論文から引用してみよう。「総轄的事文

の類書」「各階層を通じて用いられる日常生活的事文の多い通俗的な類書」<sup>5</sup>（以上、坂出祥伸）、「此等讀物、在明時蓋極普通。諸體小説之外、間遺書翰、詩話、瑣記、笑林、用意在雅俗共賞。」<sup>6</sup>「上層所収、多雜採廣記所引及元以來之文言傳奇。下則明人詩詞散文相間之通行小説」<sup>7</sup>（以上、孫楷第）、「図板が多いのと、版面を上下二層に分割する」<sup>8</sup>（尾崎勤）、「天下四民の利用、便観に資するために、百家の衆技の正なるものを集め、机上山積みの諸書を精読するまでもなく、本書を開けば袋の中の物を探すように容易である」<sup>10</sup>（『五車拔錦』小川陽一による序文翻訳より）とある。「日用類書」の特徴をまとめると、内容的な面では雅俗に関わらず四民を対象に総括的な事文を掲載した検索しやすいダイジェスト版であり、形式的な面では形の大小に関わらず、図版を入れながら必要に応じて独立した上下二層（時として三層）に分かれる場合があることが挙げられる。

日本においてはどうかであるか。まず類書全体をみたとき中国の故事が原漢籍からではなく、類書を媒介として江戸時代の文芸作品に取り入れられたとして、中国の類書、またそれを扱いやすく一層簡便にした「和製類書」の存在に注目したものが神谷勝広編江戸怪異綺想文芸体系3『和製類書集』（高田衛監修、二〇〇一年十二月）である。ここで注目されているものは、主に故事を中心に扱った書物で、孫楷第によって中国小説の種本として「通俗類書」と命名された書物である。

また、日本に中国「日用」類書が少なからず輸入され、そのうちの何点かは現在まで残存していることが、坂出祥伸「明代「日用類書」醫學門について」<sup>11</sup>や、前出した『中国日用類書集成』に

て確認できる。小川陽一『五重抜錦』（『中国日用類書集成』第一巻、二〇〇四年）「解題」にもわが国に現存する明代日用類書は二十数種あると述べられている。つまり、中国日用類書という生活知識・情報を本にまとめて読者に提供するといった明確な意図を持つ書物が、少なくとも江戸時代には日本に存在していた。そして、江戸時代の早い時期から、日本人による日本の生活情報を掲載した書物、つまり和製日用類書が出版されていたと考えられる。日本の文芸と中国の日用類書との関係を指摘した研究に徳田武『近世近代小説と中国白話文学』<sup>12</sup>がある。その第二章に近世期における中国故事集と本邦故事集について次のような記述がある。「明刊本が多く渡来して邦人を啓発し、忠孝が封建制維持のための道徳として鼓吹され、唐土の故事集に対抗するものを作ろう、という三要素が統合されて、本邦の近世における故事集盛行の基盤となった」と、本邦の故事集が明代の故事集に触発されて生まれたものであるとの考えを示している。しかし明の書物に影響を受けたものは文芸だけではないのである。

では、類書の特徴を持ち日本で刊行され、主に日用知識を情報として扱った和製日用類書にはどのような書物があつたのであるうか。このような実用書の類は多く見ることができ、それらは書名や大きさなどといった書誌的な項目に系統立ててみることで大変困難であるため、分類しての研究が大変難しかった。しかし、ある一定の名称を持つ日用類書が出版されるようになってくる。書名の中に「重宝記」「萬寶」「大雑書」等といった語句を入れている日用類書である。特に重宝記は書名にその内容を明記していることが多いため、これらを個々に紹介、研究するというこ

とは多分野においてなされてきた。特に、一九七九年から勉誠社より近世文学資料類従参考文献編『重宝記集』が出てからは、より身近に近世期の日用類書に触れることができるようになった。しかし元禄期に刊行された重宝記とその関連書物が中心であり、日用類書全体として考えれば氷山の一角にすぎなかった。

重宝記の研究は、作者像を探る研究が最も早い。一九三〇年、大田栄太郎「重宝記類と苗村丈伯（道益）——武家重宝記の発見など」<sup>14</sup>「苗村丈伯の略伝 附 男重宝記と浮世鏡との比較」<sup>15</sup>などによれば、井上和雄「元禄版『女重宝記』」（一九一六年）において、「男重宝記」の作者「艸田寸木子」は、「女重宝記」の作者「苗村丈伯」の姓苗村を指すため、両重宝記は同一の人物の作である、とする説を紹介している。他にも重宝記の影印、詳細な検証と解説を刊行したものと、大島建彦編『江戸神仏願懸重宝記』（一九八七年）、加藤安雄解題『庶民生活資料集成』「紙渡重宝記」などがある。重宝記の典拠研究として和田恭幸「職業と物の由来譚——『人倫訓蒙図彙』および『人倫重宝記』の典拠——」（一九九六年）<sup>17</sup>、山下琢巳「高井蘭山編『女重宝記』所載へ胎内十月の凶」考（二〇〇三年）<sup>18</sup>、諸本調査・研究として長友千代治「重宝記の源流——『家内重宝記』と『昼夜重宝記』——」（二〇〇二年）<sup>19</sup>が挙げられる。

鈴木俊幸編『近世書籍研究文献目録』（一九九七年）の中で「各文献に分類を施し整理してある」<sup>20</sup>が、その十二章「板本」の中の一節として「重宝記」が見られる。他にも「教育関係書」「叢書」「雑書」などの節も見られるところから、日用類書としての分類は行っていないことがわかる。しかし、日用類書の中の一

書である重宝記が、「重宝記」としての枠を持って研究され得ることを示唆している。重宝記を各々別個に見ていくのではなく、「重宝記」としての流れの中で一書毎に捉える考え方を初めて行ったのは、長友千代治『江戸時代の書物と読書』<sup>21</sup>である。長友氏は各地に散らばる膨大な量の重宝記を調査し、その書名とてきうる限りの書誌情報を掲載した「重宝記年表稿」<sup>22</sup>を出した。二〇〇四年には臨川書店より同氏監修の『重宝記資料集成』<sup>23</sup>が発刊され始めた。以降の続刊が待たれる。

### 三 和製日用類書—重宝記—

和製日用類書の例として「重宝記」と「万宝」を例にあげたい。大きな分類として「重宝記」「万宝」と本稿では呼ぶが、重宝記も万宝も単独の書物の名前ではなく、重宝記は『家内重宝記』『女重宝記』といったように「重宝記」と書名の一部からの呼称であり、「万宝」も日本においては『万宝大雑書』『万宝知恵袋』といったように日用類書にあたると思われる書物においてその書名の一部に使われた語句である。重宝記と万宝については梅園堂（都の錦）『元禄大平記』（京青山為兵衛板、元禄十五年刊）に次のような場面が出てくる。

（京の本屋）当世はただ堅い書物を取り置きて、あきないの勝手には、好色本か重宝記の類がましじゃ といえは、（大坂の本屋）おしゃればそうじゃ、すでに大坂において、家内重宝記が出来はじめしより此かた、其類棟に充ち牛に汗

するほどあり。しかれども、この頃は、はや重宝記も末になり萬宝にうつる。

『元禄大平記』のなかで大坂の本屋は重宝記が売れ「其類棟に充ち牛に汗するほど」類板が出たものの、やがてその売れ筋が重宝記から、万宝に変わっていったと、重宝記や万宝はこのように形で紹介される。ここで出て来る重宝記・万宝ともに、実用書としての位置にある書物である。重宝記を「実用書」と言っているのは他に市古夏生「江戸筆禍事情」<sup>24</sup>などがあり、長友千代治「重宝記年表稿」の英文題が「How-to Manual Catalog」としていることに代表されるように、これらの書物が文芸書ではなく日常生活における実用書、つまり日用類書であるとして問題はないであろう。その刊行において重宝記の最も古い物は『元禄大平記』によれば「家内重宝記」（元禄二年刊）であるとなっているが、長友氏の「重宝記年表稿」によれば『家内重宝記』よりも前に天正三（一五七五）年『聞香重宝記』、寛永元（一六二四）年『但馬神社重宝記』、天和元（一六八二）年『男女日用重宝記』<sup>25</sup>がすでにあるということである。重宝記と銘打った書物は現代においても『台所重宝記』などは復刻されているなど、いずれにしても相当の年代を超えて現代に至るまで出版されつづけているところに注目したい。それだけ人々はそこに載っている知識・情報を取り入れる手段として信頼していたことが推測できる。重宝記は、大ロングベストセラーであったのである。それでは日用類書の中で、どのような書物が重宝記と名づけられたのか、内容は様々であるものが「重宝記」たりえた共通点は何であろうか。

重宝記の目指した姿勢について考えてみたい。以下に挙げる『小児療治調法記』の序文の紹介説明と、『陰陽師調法記』（森岡貞久作、書林米川、京森岡貞久板、元禄十四（一六七二）年刊）の序文とを参照する。

『小児療治調法記』は、洛東養拙斎退春の序文によれば、一日、書林川勝氏（元禄へ一六八八—一七〇三）から宝曆へ一七五二—一七六三ごろ、京都三条通高倉西入で営業した英松軒榭屋五郎右衛門が那須玄竹先生（奈須とも書き、名は恒章とも恒昌とも各。曲直瀬正慶門。伝書不明ながら『薬方彙纂』の著がある。民部卿となり久昌院と称す）の『医方聚宝』（万治二年序。貞享二年版、宝永三年版がある）を持参、小児門を和字にして（漢文を平仮名まじりの読み下し文にすること）、世間の便利に備えよとの要請を受け入れて、『小児療治調法記』と題したという。全部和語であるからといって輕易、取るに足りないものとするな、その義はすべて那須先生の意、那須先生の意はすべて文献にもとづく故人の意という。（当時は、漢字漢文で書かれたものが専門学術書、漢字仮名まじり文は啓蒙大衆書）ただし、痘麻（もがさ、はしか）の二門のみは、自分が方論の下に、その本拠を記した、と書いている。

ここに重宝記の本質がよくうかがえる。重宝記は専門書を正確にわかりやすく解した本なのである。（注（21）、三三四頁）

#### ・陰陽師調法記序

旋風には一期に一度あはずとも、正しき陰陽師には折、あひて諸事の是非をきくべし。近来、呪詛調法記と号して世に流行せり彼書に、漏落たるを取集め、今一冊として梓に鏤め題号を陰陽師調法記と云。此書を不断に携へ見給はば、陰陽師にあはずして身上乃禍福諸事の吉凶おもひのままに知る事毛頭虚偽なしを云尔

この二つの重宝記の序から、ある一つの専門的分野に関する知識を簡易に庶民に説いた書物が『重宝記』であることが伺える。

『陰陽師調法記』にしても、日々の日常生活の中において「陰陽師いらず」（『陰陽師調法記』序文より）の本になることを目指しているのである。この重宝記の姿勢は中国日用類書の医学門と呼ばれる書物と同じ姿勢であることが「日用類書医学門は、正統的な医薬書が学習するための書物であるのに対して、座右に備えておいて、急場に活用する辞典なのである。」との記述から伺われる。専門的知識を庶民に簡便な知識にして伝えるという姿勢がみえることは、それを読むことで突発的事故に対して個人の裁量でなんとかしようという、近世人の個人意識が世間的に高まっていることの象徴であろうか。日用類書には雑多な知識を他分野に亘って掲載するものも少なくない中で、このようにある一分野の情報を中心として詳細に掲載したものが多いいのも、一つの特徴であるといえよう。なお、一概にはいえないことであるが、主題別の重宝記は中本形式を取ることが多いようである。例を挙げると、病氣本復を目指した医療関係と思われる重宝記の七種の体裁を確認したが、これらは七冊全て中本であった。病氣・事故などの即時

性を求められる医療を主題においている重宝記は、持ち歩きできることも求められたのではないだろうか。重宝記の「詳細な情報」は近世人にまさしく「重宝」されたようである。一例として挙げしておくが、柳沢藩主、柳沢信鴻（米翁）著、『宴遊日記』の中において信鴻が天候に関してかなり細かい記録をしていることに対し、花咲一男『柳沢信鴻日記覚え書』（三樹書房、一九九一年一月）に、以下のような記述がある。

外出の頻度の多い米翁は春・秋の変わり易い天候に対処するために通俗気象観測術は一応マスターしていたらしい。風向きや降雨を判断して、その日の行程を中止したり、あるいは強行したりするのは、女性をまじえた数人から十数人の一行のリーダーとしての米翁の責任でもあった。彼は正徳の『見要記』寛延の『舟乗調方記』安永の『風雨天眼通』などにも目を通していたに違いない。

ここで紹介された三冊の本はいづれも日用類書と呼べる書物である。また、当時の日用の知識や情報を伝えるという点では『開化重宝記』（明治十二年刊、稲葉永孝著、東京都立中央図書館蔵）も、その意図が最も顕著に表れているものの一つであろう。

#### 開化重宝記目録

- 一、諸願届文例 三十四例
- 二、附養子女貰受一札 三、徴兵関願差出順序 四、徴兵免疫猶豫願届一式 十八例
- 五、警視署へ可申出件 六、内国郵便税表 七、同為替

- 税表 八、出訴期限規則 九、勸解裁判の規則畧 十、印紙貼用の心得 十一、諸証書文例 十二例 十二、附り地所規則の畧 十三、附り建物売買書入規則 十四、附り受証人規則の畧 十五、東京より各地電信賃銭表 十六、同新潟間電信賃銭表 十七、鉄道列車賃銭表 十八、同発着時刻表 十九、同新橋品川間賃銭表 二十、中山道郵便馬車賃銭表 廿一、同紙幣通送料 廿二、東京ヨリ宇都宮間乗合馬車賃銭表 廿三、同荷物運送料 廿四、三菱汽船各港乗合賃銭 廿五、通票会社金子通送料 廿六、同物価 廿七、同配達料 附録 二十八、違式註違条例 二十九、改正日本全図 三十、府県管轄表

ここでは徴兵、鉄道、郵便、為替、電信、府県管轄などという新しく明治時代に登場した言葉が見られる。このように『開化重宝記』に書かれた内容を辿ることで、文明開化といわれた当時、どのような情報を人々が生活の中で真に求めていたのか、見ることができる。当時の社会や風俗を伝えた日用類書の重要性を説いたものに、坂出祥伸『五車拔錦』『解説』のなかに王重民『美国国会図書館中国善本書録』が載せてあり、そこには「この書に載せられているのは、近八百年に於いて、民生日用、文学哲学、禮俗遊芸から医卜星霜などの事に及ぶまで、およそ世道人心にかかわることは、みな載せている。社会学史を論ずるもので、真に下級社会の人生を知らんとするなら、この書はどうしても読まなければならない」とある。長友氏も重宝記について「新商工業都市大阪町人の生活技術、生き方について書いた本が重宝記の類であ

る<sup>21</sup>」と説明し、その内容が「総合的に編集したもの」と「主題別に編集したもの」の二種類があると述べている。いずれにしても「家内万般の総合的な事典」であり、知識・情報を細かくわかりやすく、すべての人に紹介するのが重宝記の役目であったのであろう。これは第二章にて前出した中国日用類書の定義とされていた「総括的事文の類書<sup>22</sup>」であることと、重宝記・万宝の性格が合致するものである。部分的に前出しているが、中国日用類書の特徴を明確に述べている文章をここに引用しておく。

これらの書籍には、前出の表題の上にはしばしば「士民萬用」「四民利用便觀」「四民湊用」等の文字が冠せられている。これによって、これらの書籍が広く各階層の士民（四民）の日常生活に必要な実用的知識を記載していて、しかも、その知識を敏捷に把握できるように編纂されていると推測できる。

さらに注意したいのは、そのような実用的知識がいくつかのグループに分類されている点である。：（中略）：このように知識を門類に分類しているのは、伝統的な「類書」の形式を踏襲している。<sup>23</sup>

これまでの調査によると重宝記は六十一種を確認（再板や改板の問題は無視した数字である）することが出来た。日用類書、特に重宝記としての特徴をまとめると、以下のようになる。まず、日用的な知識を総合的にまとめた類書的なものがある一方で、主題別に編集され出版された本もあったこと。次に、主に一卷一冊である時は中本形式のものが多いこと。また、読者を限定しせず、

万人に必要とされているという趣旨をもった序文が見られることである。

重宝記は内容を主題別にして範囲を広げずに限定し、形式を縮小することで、日用的な知識情報を特定化すること、またその情報を利用者が簡便に引き出せること、極端な例では携帯可能であることを目指した日用類書であったのである。

#### 四 和製日用類書—万宝—

これまで重宝記について詳しく述べたが、前出した都の錦作『元禄大平記』において、重宝記にとつてかわるような存在で世の中に登場したように見える万宝についても考えてみたい。

江戸時代の出版物の中で「萬宝々」という書名を持つ本は少なくない。しかし、「万宝」という言葉は、江戸以前の節用集には現れない。この「万宝」の普及は明代の『万宝全書』の書名の中の万宝という中国日用類書の言葉からのものではないだろう。中国において、清代になっても日用類書の類は「万宝」の書名を引き継ぎ、『増補万宝全書』など四種確認できる。江戸時代において万宝とつく書名をもつ書物がいわゆる日用類書として認識されていたことは、現存する多くの万宝からも理解できる。では、重宝記との違いはどのように表れていたのであろうか。それを探るために貝原篤信（益軒）『萬寶鄙事記』<sup>24</sup>の目録を引用する。

第一衣服門 第二宮作門 第三器財門 第四硯墨筆紙門  
第五文字門 第六刀脇指 第七収種法 第八花 第九香 第

十火 第十一紙細工 第十二染物 第十三去蟲鼠 第十四雜門 第十五占天氣 第十六月令 第十七養氣 第十八食禁 第十九用藥 第二十灸治

目録に目を通してみると万宝は、一冊の中にありとあらゆる生活の知識を詰め込んだものであることがわかる。そして、分類名称に第五までであるが「門」を使っているのがみえる。これは中国の類書の分類法であった。またこの『万宝鄙事記』の目録には、それぞれ但書がついており、特に巻之一目録内の「第二 営作門」のものはこの『万宝鄙事記』の主旨ともおもえる内容となっている。

## 第二 営作門

此門の内には家のつくりやうをはじめ、やね板の朽ざる仕やう、わらぶき、かやぶきのこしらへやう、土蔵の作りやう、ぬりべい、しつくぬ、さびつち、かべのうはぬり、小池泉水のつくりやう、蓮池の仕様、茶園のうへやう、一切の普請、作事にはりはりたる事、残らず是をしるす。

此書、一部八冊二十門に注す所、和漢の書を引証とし、又古語あるひは、俗説をもまじへて、辺鄙の人々の見やすく心得やすからしめんとためなりと。

この万宝もまた、中国の日用類書における「日用類書は、「民」の日常生活に有用な情報を提供すべく編纂されている」と同じ姿勢であることが伺われる。先ほど、重宝記そのものの特徴と

して日用的な知識を総合的にまとめた類書的なものがある一方で、主題別に編集され出版された本もあった、という点を取りあげた。主題別にまとめられた本も多かった重宝記に対して、万宝は一冊の中にあらゆる生活知識を詰め込もうとした、生活大辞典的な役割を持つていたとも考えられる。それであるが故に、その一冊の中には読者の要求に答える為に厳選された知識しか記載されていないはずである。

また、そのように記載されている知識が多ければ多いほど、書物としての磨耗も激しかったのではないであろうか。『海内無双万宝大雑書』（鈴木万次郎編、岡村盛花堂、明治三十四年十一月刊、東京都立中央図書館蔵）は、時代を下っているが故に前時代の万宝の反省を基に作られた万宝であると考えられる。この『海内無双万宝大雑書』は和綴じの書物であるが、全ての丁が紙を二重にして袋綴じしており、その袋の内側を覗くと、紙背に活版の印刷があり、この万宝は裏紙で作られていたのがわかるのである。紙を二枚重ねて製作しているので、丁自体は分厚く、かなり頑丈な書物に仕上がっていて、粗雑な扱いにも耐えるものである。おそらく何度でも頁をめくることを前提にした、本を作る側の意図があったのだらう。このように紙を二重にして袋綴じしてある場合は珍しいケースであるので、この『海内無双万宝大雑書』は東京都立中央図書館蔵のものだけでなく、他に所蔵されているものも調査する必要がある。

万宝は重宝記とは版式からもその差異を見つけることができる。一概には言えないが、重宝記の大きさが小本から中本サイズ（または大判の一枚摺り）の携帯可能なものが多いのに対し、万宝や



特に大雑書などは大本で刊行されている。同じ日用類書でも、その名称を違えて売り出すために、重宝記は携帯用に、万宝や大雑書は百科事典としてそれぞれ特長を持たせて売り出したとも考えられるのである。『元禄大平記』のなかで、重宝記は万宝にベストセラーの座を取って代わられるが、重宝記と万宝の差異は、含有している知識・情報の量と質の違いであるといえるだろう。

## 五 まとめ

雑併に「しだされたさてもこまかな調法記」という句が見られる。重宝記の内容が当時の人々の欲しい情報に対して丁寧に記述されていたことが窺われる。また、内容としてはどちらも日用的な知識を扱っているにもかかわらず、重宝記と万宝には書名だけでは異なる差異が見られた。重宝記は、中国日用類書に見られた特徴①四民萬用を目指す点、②生活技術、生き方などの実用的知識を掲載する点、③知識情報が分類されている点、④総括的である点<sup>29</sup>を備えて出版されていた。このことから、重宝記を和製日用類書と位置づけることが可能である。また、万宝はその書名自身や「〓門」といった分類法が中国日用類書の一つから受け継いだ流れがみられた。まだ問題も多いのであるが、重宝記や万宝といった実用書が中国日用類書からヒントを得て作られたものであると考えたい。

## 【注】

(1) 本稿は二〇〇三年に共立女子大学大学院に提出した修士論

文の一部を新たに書き直し、二〇〇四年七月に行われた千葉大学日本文化学会で発表した原稿をもとに作成したものである。

(2) 『成城国文学論集』第十輯、第十一輯一九七八、九年、成城大学大学院文学研究科編

(3) 『近世中国教育史研究』林友春編、国土社、一九五八年

(4) 小川陽一『日用類書による明清小説の研究』、研文出版、一九九五年

(5) 「解説—明代日用類書について」『中国日用類書集成』第一卷『五車拔錦』、酒井忠夫監修、一九九九年、汲古書院

(6) 「通俗類書『國色天香』」、『日本東京大連図書館所見中国小説書目提要』巻六、孫楷第、一九三一年、国立北平図書館、国会図書館蔵

(7) 「通俗類書『萬錦情林』」、(以下、(5)に同じ)

(8) 孫楷第は特に中国小説の種本となった類書を「通俗類書」と命名しており、上記のものは通俗類書の説明からの引用であるが、同じ類書の説明であるとし便宜上ここに載せておく。

(9) 「怪奇鳥獸図巻」と中国日用類書、尾崎崎、二〇〇四年六月、『汲古』四五号、汲古書院・古典研究会

(10) 「解題 五車拔錦」『中国日用類書集成』第一巻(4)に同じ

(11) 坂出祥伸「明代「日用類書」醫學門について」、『本邦公藏明代日用類書目録初稿』、一九九九年、大阪大學文學部

(12) 二〇〇四年十二月、汲古書院

(13) 京都大学人文科学研究所の横山俊夫「大雑書考—多神世界

の媒介―』『人文学報』第八十六号、二〇〇二年三月、において大雑書の性格が委しく述べられている。

刊行年未詳。

(29) 『軽口頓作』雲鼓編、宝永六年刊

(14) 『書物展望』第十七卷第十号

(15) 『書物展望』第十七卷第十一号

(16) 『浮世絵』第十六号、大正五年九月発刊、とあるが未見。

稿者は『書物三見』（昭和十四年、書物展望社）に所収のもので確認。

(17) 『芸能文化史』第十四号

(18) 『東京成徳短期大学 紀要』第三十六号、東京成徳短期大学発行

(19) 『大阪商業大学商業史博物館紀要』第二卷

(20) ペリカン社。引用は「解説」三一―六頁より

(21) 長友千代治『江戸時代の書物と読書』、東京堂、二〇〇二年六月。

(22) 「重宝記年表稿一・二」、長友千代治、二〇〇三年・二〇〇四年、『文学部論集』八十七卷・八十八卷、佛敎大学

(23) 『重宝記資料集成』第一卷、長友千代治、二〇〇四年九月、臨川書店。

(24) 『国文学 解釈と鑑賞』第四七卷九号臨時号、市古夏生、平成十四年七月、学燈社

(25) 「重宝記年表稿」の書誌情報によれば、前者二作は写本、『男女日用重宝記』が刊本ということである。

(26) (5) と同

(27) (5) と同

(28) 『益軒全集卷之二』全八卷、貝原篤信（益軒）著、板元、

(おの さやか・千葉大学大学院社会文化科学研究科在学)